平成２１年（２００９年）１月２５日（日）　（第４４号）

東九州支部報

支　部　忘　年　会　(12 月 13 日(土) 臼杵市「喜楽庵」にて)

今年も重廣さんを交えて

平成二〇年の忘年山行と忘年会

このごろ、年の瀬は登山家の重廣恒夫さん（ＪＡＣ関西支部長）を交えての忘年登山と忘年会が恒例となっています。一〇〇年に一度の『未曾有』の不況と、その影響で深刻な雇用不安の広がるなか、平成二〇年の暮れも近づく一二月一三日、一四日の両日、今年も重廣さんをお迎えしての忘年山行と忘年会が、支部会員・会友の元気な顔が勢揃いし、盛大に行われました。山行は、昨年の忘年山行に「引き続いて、重廣さんの「日本全国四〇〇〇山踏査」の山登りを一緒に楽しもうという企画で、一三日は元越山と、彦岳、一四日は鎮南山と樅木山で、忘年会は臼杵市の料亭「喜楽庵」でふぐ料理でした。

二日間のことを久保会員に報告をお願いしました。

美味しいフグと山を満喫

報告者　久保洋一

元越山と彦岳へ

一二月一三日、一四日の二日にわたっての山登りだ。初日は佐伯の元越山。木立の登山口に八時三〇分に集合。私たちは加藤さんの車に便乗して、石川さん、首藤さんと高速で佐伯に向かった。雨が降りそうではないが、天気はあまりすっきりしない。

現地に八時頃到着。駐車場にはまだ一台着ているだけだ。しばらくすると続々と車が到着した。最後に園田さんの車が到着し、今日の参加者予定者十八名が全員揃ったところで、重廣さんのリードで準備体操をして、八時四〇分に出発。

《　も　く　じ　》

平成２０年忘年登山と忘年会	1
平成２０年年次晩餐会	3
高嶺山ほか	5
鞍岳・高千穂野	6
式部岳	7
クラブ・山のいでゆ愛好会	8
９３歳で久住山	9
向うかまど谷遡行①	9
英・湖水地方トレッキング①	10
牛頭山	11
戸次本町の三角点	11
私の無名山ガイドブック 36	12
お知らせ	13
後記	14

この時期は天気さえ良ければ元越山頂からの雄大な眺めは、わざわざ来られた重廣さんにも印象深いものになると思うのだが、この天気ではそれも期待できそうもない。

竹林の中の小径を登り、落葉の絨毯になった登山道を登って行く。下の地蔵を過ぎ、スギ林を登り切ると林道で、ここでまで約一時間。

林道で一休みしたあと再び登りだ。急な登りを終えるとしばらくで中の地蔵で、その先から何度もアップダウンの後、一〇時二五分に山頂に到着。

（元越山頂にて）

頂上には一等三角点や珍しい子午線の石柱などのほか、国木田独歩の碑文もある。明治の文豪、独歩は教師として佐伯市に八カ月滞在した間に二度も元越山に登ったという。

別ルートで登った西さんたちも合流し、全員で山頂の記念撮影。濃いモヤで、佐伯市街や鶴見半島がぼんやり見えるだけで、やっぱり景色はぱっとしない。風はないのでそんなに寒くはない。

あまり景色も見えないので早々に下山だ。西さん、中野さん、小竹さんは別ルートで下っていく。私たちは登ってきた道を引き返して下りた。一一時五〇分に登山口に到着。ここで昼食をとることになった。

さて、次は津久見と佐伯の境にある彦岳だ。国道三八八号線から高速道路と平行して走る県道津久見・佐伯線を津久見に向かって引き返し、彦岳トンネルを過ぎると道路脇に広場があり、奥に木の鳥居がある。ここが彦岳トンネル登山口だ。

私たちはさらにその先の、尺間山へと通じる林道を車で登っていく。そして彦岳トンネルからのルートと合流するところに車を止めて登り始める。最初ちょっと行き過ぎて戻るという加藤さんらしからぬミスもあったが…。ここからの登山道も快適だ。

ここから一緒に登ったのは私たち五人だけだった。ここは今年の元旦にやっぱり加藤さんたちと初日の出を拝みに彦岳に登ったのと同じコースだ。私もこのコースで五回目くらいなので道はよくわっている。

稜線道から植林地の中のジグザグ登りとなり、床木からのルートと合流して少し登ると主稜線に出た。痩せ尾根のところにくると左手に岩がある。ここで首藤さんは若い頃に岩のぼりの練習をされたことを懐かしそうに話されていた。

山頂が見え始めてからもしばらくのアップダウンで（今回は意外に長く感じた）、最後は暗い林の中のジグザグ登りのあと、木の階段の急登でやっと山頂に着いた。

（彦岳山頂にて）

山頂には林道から登ってきた西さんたちはもう着いていた。私たちが登ってしばらくしてから、トンネル口から登ってきたメンバーも到着した。

山頂は風が出てきた。それに冷たい風に吹かれて少し小雨も舞いはじめた。元越山に負けないほどの雄大な景色も、すっかりかすんで微かに佐伯湾や、大入島が見える程度だ。

これはまずいと、急いでみんなそろって記念撮影をし、早々に下山開始だ。次第に天気は悪くなるばかり。かなり速いペースの下山だ。（これで遠江さんは膝を痛めてしまった。後日、宮崎の式部山もこのとき痛めた膝のために途中まで登ってリタイアーした。）

心配していた雨は、下山まではあまり降らずにすんだが、下り終えたところから次第に本降りだ。下山後は、登りでバラバラだったメンバーが合流し、一緒にそろって臼杵市内へ。

加藤さんが予め見つけておいた今時の銭湯で湯につかり今日の汗を流した。気持ちがいい。外は雨がぱらぱら降っている。風呂から上がると臼杵駅近くの『老人憩いの家』へ移動。ここは、臼杵市山岳会メンバーの紹介で、西海添の地元の方から特別配慮頂いた、今宵の我々の宿泊場所だ。そのためみんな寝袋持参だ。

忘年会

ここから忘年会会場の喜楽庵へは夜道を歩いていった。みんな傘をさしている。「えっ、山登りに来たのに何と用意のいいこと」と私は感心してしまった。私は濡れながら歩いていたら中島先生が傘に入れてくれた。みんなこれから舌鼓を打つ河豚が気持ちを盛り上げてか、意気揚々だ。しばらく歩いて「ふぐ処」に着いた。途中、戻れるように夜道を確認しながら歩いた。酔ってしまえば果たしてうまく戻れるものやらなんて思いながら…。

さあ、宴会場だ。こんなむさくるしい格好でくるのはかなり憚られる格調高いここは、なにしおう臼杵の由緒ある暖簾の『喜楽庵』だ。しかし、ここのオーナーは我が日本山岳会会員の山本さん。もちろん会員だから特別待遇・・・。

さていよいよ今日のクライマックスの忘年会だ。最初にみんな揃って、酔っぱらう前の記念撮影。そして、加藤さんの司会で本日の宴は始まった。梅木支部長の挨拶。毎年の遠来のお客さん、重廣さんからもご挨拶。それから山本会員（ご当家のご主人）からもご挨拶をいただき、大分県山岳連盟の首藤会員の乾杯の音頭でいよいよ待ちに待ったふぐ刺し。これは美味しい。みんなの笑みがこぼれる。あとは飲んだり食べたりしながら各自、自己紹介。私がまだ知らない人もいた。

今年も北九州支部から日向さんが駆けつけてくれた。義理堅い人だ。私の挨拶のとき今年の山登りで印象的な山登りとして富士山と天神原山の話をしたら、加藤さんがそれを受けてよし来年の忘年会登山は新百姓山、天神原山、木山

内岳にしようとその場で皆に話って決めてしまった。さて、テーブルにはふぐ鍋のあとで作ったお粥。これがまたおいしい。喜楽庵の山本さんに感謝、感謝・・・。

みんなほろ酔い気分で今日の宿に戻る。雨が降ってなかったせいでみんな傘を喜楽庵に忘れて戻ってしまった。実は、感心したあの傘は魁いの家の置き傘だったのだ。あとで喜楽庵さんに傘を戻してもらう手間までかけてしまったのである。

公民館で二次会、加藤さんの独壇場気味ではあったが、大いに盛り上がる。しかし、近所迷惑も考え、それに翌日の山行も考えて、一〇時には閉会し就寝。二〇〇八年の忘年会は終了・・・。

鎮南山と樅木山へ

翌朝は六時に起床。みんなで宿泊所の後かたづけと清掃。朝食は市内のジョイフルで済ます。さて、本日の山は鎮南山と樅木山だ。まず、鎮南山へ。

天気予報は夜半から今日の午前中まで雨となっていて、心配していたが、昨日午後から降り出した雨は、明け方には上がっていた。空模様は半日繰り上がってくれたのだ。

高速道路横の高台にある駐車場に車を止め高速道路を陸橋で渡って登り始める。私はこの山はもう一〇回以上登っているのでなじみの山だ。地元の人が散歩がてらに登っているので登山道はとてもしっかりしている。

（鎮南山頂にて）

最初は展望所のある若ノ尾へ。それから少し南の三角点のある本峰へ登った。そこで山頂の集合写真。下山は山庵寺経由となる。

竹林を抜けて、スギ林の近道を下って、お寺に寄る。ここでみんなで、熱いお茶をいただいた。山庵寺から下る途中で、登ってきた道と合流して下山。

臼杵市民の親しみの山だけあって、下りはたくさんの人と行き違う。

次の山は樅木山だ。国道二一七号線を北上し、途中コンビニで弁当を仕入れ、佐志生から幸崎に抜けるトンネルを通って、中尾から佐志生に通じる林道を車で上って登山口に行った。

中尾ダムの手前から、沢山のウオーキングをしている団体（二～三〇〇人くらい？）に会った。その団体を尻目に私たちの車はどんどん林道を登っていく。やがて峠に着いて車を止めた。

私たちのグループだけで、車が八台である。よくこんなところまで車できたなーと感心する。以前、私が一人で登ったときはもっと手前に車は止めて歩いた。

さて本日二つ目の山だ。尾根道を軽快に進む。真新しい道案内が『あんげで』『こんげで』『そんげで』などと大分の方言丸出しで書いてある。思わず笑ってしまう。実にユニークな道案内だ。そんな道案内に気をとられながらいつのまにか山頂へ。

山頂では先に記念撮影を済ませて、それから昼食だ。今年も北九州の日向さんが持参のシャンパンをみんなに振舞ってくれた。ありがたい。重厚さんは帰りの飛行機の時間があるので、大分空港まで送る佐藤さんと一緒に、一足先に下りていった。

（樅木山頂にて）

私たちはゆっくり食事をして下山。途中、後藤先生にこれはカシ、これはシイの木など登山道脇にある立派な木々をいろいろと教えてもらった。登山口近くでは飯田さん、後藤先生、遠江さんが椎の実を拾っていた。後藤さんは苗をつくるために蒔くとか。飯田さん、遠江さんはお酒のつまみにするとか・・・。とまれ、みんな元気で下山して、楽しい今年の東九州支部の忘年会登山であった。

皇太子様をお迎えして

日本山岳会・平成20年次晩餐会開催

下川　幸一

■四六六人が出席

平成二〇年度年次晩餐会は暮れの一二月六日（土）、東京・品川のグランドプリンスホテル新高輪国際館パミール「北辰」で開催された。皇太子様がお忙しい公務のなか三年ぶりに出席されたのをはじめ四六六人の会員が集い、和やかに歓談した。東九州支部からは西事務局長、飯田勝之、佐藤壮悟、下川が出席した。

■宮下会長挨拶

皇太子様は今年八月、念願の富士山に初登頂された。年次晩餐会のテーブルも「富士山」と名づけられていた。晩餐会に先立ち秩父宮記念山岳賞受賞講演会にも出席された。宮下秀樹会長は、お迎えできたことを喜び、続いて日本山岳会の現状について次のように報告した。

一、今年は大きな成果があった。インドヒマラヤのカランカ峰北壁に天野、一村、佐藤、の各氏が初登攀し、アジア・ゴールデンピッ

ケル賞を受賞した。平出氏はインドカメット峰の南東壁に初登攀した。しかし、チベットクーラカンリは雪崩による悲しい事故があった。岩手では大地震でバスが転落し、会員が重症を負った。日・中・韓三国学生交流登山は、韓国・雪嶽山（ソラクサン）などで行われた。来年は中国の六〇〇〇メートル級の山に挑戦する。

二、一二月一九日から一ヶ月間、剱、穂高、八ヶ岳の三地域を対象とし、日本山岳会が冬山の天気予報を発信する。大いに利用して欲しい。

三、元気な会員を紹介したい。南川金一会員は、機関誌『山岳』の編集に尽力されたが、二〇〇〇メートル級以上の六四二座を七年前にすべて登頂された。今度は一九〇〇メートル級の山々に挑戦され、もう少しで終わるとのこと。西孝子会員は二〇年来、ヒマラヤ通いを続けておられ、今年一五回目のカラパタールに登頂された。

四、三つのことをお願いしたい。一つ目は一二月から施行された法人改革は会の行く末を決めるものであり十分に検討していきたいこと。二つ目は各地で展開されている森づくりで、日本山岳会ならではの森づくりがどのようなものか、運営ルールを考えたいこと。三つ目は、山の記念日の制定に向けて活動したいことだ。「山を敬い、山を尊ぶ」という言葉をもとに、美しい自然を後世に残すきっかけになればと思っている。

■新名誉・新永年会員の紹介

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は五二人とのこと。

新名誉会員二名が紹介された。続いて新永年会員三五名が紹介された。一九五八年四月から翌年三月までに入会した会員で、以降継続して五〇年間、会員として活躍された。本日は一八名が出席し、宮下会長から永年会員章が手渡された。

■秩父宮記念山岳賞

第一〇回秩父宮記念山岳賞は、「大日岳巨大雪庇の研究」と東海支部の「ローツェ南壁冬季初登攀」に決定し、表彰式が行われた。

■新入会員は五一人

続いて、新入会員の紹介。今年は五一人が新しく会員に加わった。代表して堺澤清人会員が挨拶した。「先輩諸氏の指導をお願いしたい。今まで山々に教えてもらった色々なことを若い人に伝えたい。自然環境の再生などにかかわっていきたい」などと話した。当方も新入会員として三年ぶりの皇太子さまご臨席の壇上紹介で緊張する。

■開宴

恒例の鏡開きは、皇太子さま、宮下会長のほか元国土交通相・谷垣禎一会員ら六人で行った。酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。続いて乾杯の音頭では、嬉しいことに女性では初の我が東九州支部の西孝子事務局長ではないか！！タイ国際空港ストの影響でネパールに七日間缶詰となり、逆に生涯経験したことのないすばらしいネパール山脈に感動した体験談、濃いブルーのネパール衣装で会場は一気に盛り上がり、西さんの力強い乾杯で会食が始まった。

メニューには「山を愛する方々へ、大地と海のコラボレーション」、「実り多き秋から雪の降りはじめる山の雰囲気」などとシェフからのメッセージが添えてあった。会食をはさんで全国二八支部会員の紹介があり、少人数の我が東九州支部は両手を挙げ、バンザイスタイルで皆に挨拶。

■貴重な図書を展示

慶雲の間の催し会場。正面を飾ったのは、皇太子さまの撮影した写真「雲表のマナスル山群遠望」だ。説明には「ネパールヒマラヤ機、窓より」とあった。二〇年ほど前に撮影されたものをデジタル処理で甦らせたものだという写真の横で記念撮影。会場には、資料映像委員会・アルパインフォトクラブによる山岳写真展で四〇点ほどの山岳写真が展示されていた。

山岳図書展には、図書委員会が日本山岳会の書庫に眠っている貴重な図書を出展していた。和書三三点、五五冊、洋書二六点、三八冊が展示された。

昭和四年に日本山岳会の図書館が設置され、現在は和書一万二〇〇〇冊、洋書四〇〇〇冊を収蔵しているとのこと。又、支部、同好会、同期会がそれぞれに山岳書籍、文献、地域活動報告などを展示、販売していた。当方「グッズ販売コーナー」にて記念に帽子、バンダナ購入。

■筑波山で晩餐会記念懇親山行（日本百名山）

翌日の懇親山行は集会委員会が主催し、茨城・筑波山で行われた。晴天に恵まれたこともあり、参加者は九八名と多く、遠方からの参加者が目立った。東九州支部は西事務局長、佐藤壮悟、下川の三名が参加。

秋葉原駅よりつくばエクスプレスでつくば駅九時集合。シャトルバスにて筑波山神社入口まで直行し、時間を節約するために上りはケーブルカーを利用し、一〇時一五分に御幸ヶ原到着。メンバーは皆バラバラの行動となる。まず左側の男体山（８７１ｍ）山頂を目指し、わずかの時間で到着。道路や川が白く光る関東平野の眺めは楽しい。遠くに富士山、浅間山、八ヶ岳が見え、その美しい姿をしばし楽しむ。

下山途中に自然研究路が右側に分岐し、男体山直下の立身石経由で一周する。続いて、御幸ヶ原経由で右側の女体山（８７７ｍ＝筑波山）を目指す。途中「ガマの石」の口にうまく石を投げ入れ祈願し、一気に山頂へ。一等三角点にストックを立て「ヤッホー」の声で西さんと判り、無事合流する。

女体山山頂からの眺望は素晴らしく、三六〇度に大きく広がる関東平野・霞ヶ浦が一望でき、遥か彼方には初冬の綺麗な富士山の姿が感動的であった。上空ではパラグライダーが海風に乗って何度も旋回し手を振っている。

頂上から北側へ三々五々歩いて下り、暖かい陽だまりの中、筑波

高原キャンプ場で楽しい昼食をとる。地元の山岳会メンバーによる恒例の「トン汁」を楽しみ、現地解散。全国から集まった山岳会メンバーとの交流で、本当に有意義な二日間であった。

月例山行報告

高嶺山(1006m)ほか

（一〇月月例山行）

岐部威吉

一〇月は一〇〇〇ｍの山で、津江の山へ。先ずめざしたのが「高嶺山」だ。福岡県との県境にあるこの山は、大分県側(日田市・前津江村)では高嶺山(たかねじ)と呼ばれているが、福岡県側(星野村)ではカラ迫岳と呼ばれている。国土調査で星野村の最高峰１００６ｍである事が判明したので、公募により命名したとのことだ。

この山のほか、この日登ったのは仁田塚(956.45ｍ)柚木南(838.45ｍ)権瀬(911.79ｍ)中野(1052.37ｍ)ヒラキ坊主(1000ｍ)大北向(999.74ｍ)上入山(838.42ｍ)の八つのピーク。

予定日が一週間延びた一一月一日、中野さんとバス停で朝五時に待ち合わせ、まだ暗くてヘッドライトをつけている。乗車、別府へ。飯田さんをのせ集合場所の別府インターへ。五時三〇分。久保さんの車に、安部さん、石川さんが同乗して到着。今日はこの六名が山行メンバーだ。

二台の車で高速に入り日田に向かって走る。日田市から高瀬川沿いの県道を高嶺山(カラ迫岳)に向けて走ると、車窓から見える川沿いの渓谷はまだ紅葉には少し早そうであった。

県境近くの登山口に七時五分着。七時一五分出発。あまり人の踏み跡がない登山道を歩いて行くが、それでもこの山は福岡県の無名山三〇一で素晴らしい山と紹介されている。なるほど、県境の稜線に出ると、福岡県側からりっぱな道が出来ていた。稜線の道脇には国境石が点々とある。金山の利権争いから旧久留米藩と天領日田との国境に埋設されたものらしい。

七時五〇分、山頂到着。ガスがかかり眺めは得られなかったが、飯田さんの説明では晴れた日は三六〇度の展望で、南東方向に釈迦ヶ岳、御前岳が見え、東側は、由布、万年山、九重連山が見えるとの事。二、三時間いても飽きないかも・・・。

今にもガスが晴れて青空が見えそうになりながら、なかなかすっきり晴れてはくれない。一五分ほどであきらめて下山開始。下山途中に小休止して八時三〇分に、大分県側に下るところから県境稜線をそのまま真っ直ぐに「仁田塚」に向けて進む。八時四五分仁田塚山頂三等三角点（956ｍ）へ。ここは周りが木々に覆われていて見通しはない。八時五五分下山を開始し、九時五分には登山口に到着。

（高嶺山にて）

空を見上げるといつの間にか、素晴らしい青空の快晴だ。九時一七分車に乗り出発。今日はこの後はヒラキ坊主と殿尾が予定だが、少し遠い殿尾を止めて、その代わりにスーパー林道沿いの三角点ピークをいくつも登ろうということで衆議一決した。

約一〇分で次の「柚木南」の登山口へ。九時三五分山頂着。四等三角点で、三角点のまわりが雑草に覆われすぎているのいで皆で掃除をして下山する。

九時五二分に林道にもどり、次の目的の山「権瀬」に向かう。スーパー林道はあちこちに落石があり、かなり荒れている。

小月トンネルの先に車を止め、かなり急な枯れ谷沿を、落石に気をつけながら登る。一〇時三二分山頂。点名権瀬四等三角点である。下山は落石の危険を避けて稜線をそのまま下り、トンネルの西に出た。一一時五分着。五分ほど歩いて車を駐車している場所に到着。

次は「中野」だ。中野さんを見ながら『中野を攻略して、そこで昼にしよう』と笑いが起こる。一一時三五分、釈迦ヶ岳に至る車道の中腹から稜線を北に中野に向かう。三角点は道より低いところにあるので、稜線下りのルートだ。山麓はきれいな紅葉で、今年はじめての色彩に感動する。一二時五分山頂。点名中野四等三角点は、山頂は狭くて六人座れば、いっぱいの広さである。ここでそれぞれ弁当をひろげて昼食タイム。

一二時四〇分、下山開始し、次の「大北向」に向かう。一三時一三分、椿ガ鼻の駐車場から稜線にとりつく。一三時二五分に大北向・四等三角点ににつく。その後尾根をさらに奥に行って、今日二つ目の１０００ｍの「ヒラギ坊主」へ。一三時三八分着。

ここに珍しい植物が群生していて、飯田さんに聞くと猩猩袴（しようじようばかま）（花の色を中国の想像上の怪獣、猩々の赤い顔に根出葉をその袴にたとえてこの名があるといわれる。）とツルリンドウと教えていただく。

（ヒラキ坊主にて）

時間も少しさがってきたが次に「上入山」に登ることになる。スーパー林道を少し引き返して稜線にとりつく。先頭の飯田さん、石川さん、安部さん、中野さん、久保さんが鉈でルートを切りひらきながらピークへと向かう。御苦労さま。小さなピークを三つ登り越して、

約一時間で山頂に着く。三等三角点は猛烈なブッシュの中に埋もれている。みんなで三角点のまわりを奇麗にして、今日最後の記念写真を撮って山を後にする。一六時七分にスーパー林道に帰り着く。

山名の無い山が多く、藪漕ぎもあり大変であったが、、非常に充実した一日であった。

参加者…安部、飯田、石川、岐部、久保、中野

鞍岳、高千穂野

（十一月月例山行）

佐藤 秀二

今月の月例は、一一〇〇ｍの山で、阿蘇の外輪山の二峰。現在の我が家の上津江からは近いので、ミルクロード沿いの鞍岳登山口入口で、大分組と待ち合わせた。こちらは遠回りをしてコンビニに寄って行ったので、遅れてしまったかと思ったが、携帯で確認するとまもなく到着するとのこと。

例年十一月は西さんがネパール行きで不在のため参加者が少ない。今年も同様に少ないだろうと思っていたら、車が三台も続けてきた。これはすごいと思いつつ合流した後、鞍岳登山口に向かう。

鞍岳は幾度か登ったことがある。隣のツームシ山との間に登山道が多く登山口が幾つもある。うろ覚えの記憶をたどりながら、案内板のある駐車場に着いた。ここから鞍岳山頂までは最短コース。駐車場から少し戻ったところにある登山口から登る。登ること約一五分、あっという間に山頂に着いた。

西さんがいないのでバンザイもヤッホーもなし。ただ、この日は天気がよく展望は最高だ。西には雲仙、北には一目山の横に由布岳山頂付近が展望できる。南に国見岳など脊梁の山々、祖母山、傾など３６０度の展望である。

（鞍岳山頂にて）

年に数度の展望を楽しんだ後、すぐ横の女岳を経由して下山。女岳は特に何もあるわけではなく通過。登りと同じ一五分程度で駐車場の先道路に出た。

次の目的の山は高森にある高千穂野へ向かう。高千穂野の読み方は「たかじょうや」。最初は読み方がわからず、インターネットで調べてこの読み方がわかった。名前の由来は現地案内板に「定かではない」と書いている。

登山口は高森へ向かう旧国道から清水寺（きよみずでら）経由して登り着いた清水峠となる。登山道は、九州自然歩道になっており、この道は北の駒返峠から外輪山の幾つかの峠を越えて矢部へと続いている。その最初の山が高千穂野である。

清水峠には、九州自然歩道と高千穂野の案内板がある。峠から電波塔が見えるがそこが登山道となる。電波塔までは道がコンクリート舗装されているが、あくまで保安道で途中車が離合が出来ないほどの道である。お昼は「猪鍋」（どうも今回の月例はこれが目的のようだ？）とのことで道具を運ぶために車を一台を上げて、後は歩いて電波塔まで行った。

電波塔が近くに見えるので歩いてもたいしたことはなかろうと思ったが、登り下りがあり、意外と距離があって車で行けばよかったと後悔。電波塔から山道に入るが、九州自然歩道ということもあって、道は整備されている。

道は平坦かと思っていたが小さな上り下りを繰り返す。その後しばらく稜線を歩いていると、ひときわ高いピークが見えてくる。標高差で１００ｍあるかないかくらい。少しずつ近づいて最後の登りかなと思っていると、木の階段があらわれた。こんなところにも階段をつけていると思いつつ、ふと前方を見るとかなり急な階段が延々と続いていて、標高差５０ｍ位はありそうだ。こんなところに「まさか！」の階段坂。黙々とひたすらに登り、足の筋肉が緊張し始めたものの止まると動けなくなりそうなので、止まらずに歩いた。坂が緩くなり、階段がなくなってその先の登り着いた道沿いに高千穂野の標識がある。

三角点はここにはなく、ここから２００ｍ程自然歩道から離れたところらしい。ピンク色のテープがあるので、やや藪の中をテープに従い進む。三角点を見に来る人は少ないようで笹が茂って、歩きずらい。テープが消えその先まで行くとやや広い台地。しかし先は下っている。飯田さんが「このあたりだったけどなぁ」とやや戻りながら笹の中へ。これは探すのが大変だなと思っていたら、「あったよー」と中野さんの声。

（高千穂野にて）

さすがにＧＰＳの力はすごい。声がする方に行ってみると三角点は笹の中に埋もれていたらしく、その周りを切り開いていた。ここで記念撮影をして、高千穂野の標識のあるところに戻り、木の階段で遅れた連中とともに再度記念撮影。今日はここまで。

再び木の階段を通って電波塔へ。楽しみな猪鍋に足取りも軽い。電波塔に着くと早々にシートを広げ、みんなで手分けして準備し猪鍋宴会。今日一番の盛り上がりで、楽しい時間を過ごす。

飯田さんは食事の後、用事があるとのことで急いで帰宅。残ったメンバーで続けていたら、雨がぽつりぽつりと落ち始めた。この日の天気予報は、夕方から雨。早めに降り出したかと皆で急いで片付けて、今日は帰ろうということに。たしか、俵山に登る予定だったような・・？このまま、清水峠で解散となり、猪鍋を食べるための月例登山？でした。

参加者…飯田、石川、岐部、久保、佐藤、遠江、中野、那須、宮本

式部岳（1218.9m）

（十二月月例山行）

中野　稔

一二月は１２００ｍの山で、宮崎県の式部岳へ。名前のなかった三角点のあるこのピークを名付けようと、平成七年に一般公募したら、釈迦ケ岳麓の和泉式部ゆかりの場所に近いことから「式部岳」と命名されたとのこと。

九州の山々の中でも秘境の部類に入るだろう。山に行く人々の目的は十人十色であり、山岳信仰の対象であった頃には考えられないスポーツの一つである。二百年以上前では、レジャーと言えば貴族や皇族だけに許されたものであり、庶民には盆と正月の行事が主なるレジャーだったと心得る。時は流れて人々はこの惑星の到る所に出没しては様々な活動をしているらしい。それが平和的活動であり、自然破壊ではない事を遠くから祈る事しかできないという現実は悲しいものがある。

大分を土曜の夕刻に宮崎県を目指して出発。夜の帳が下りた法華嶽公園には、釈迦ヶ岳に単独登山した安部先生がキャンプ地を探しておいてくれた。まずは感謝して、石川さん御用達、遠江さん準備の獅子鍋、西さん持参の永楽庵の蕎麦にも感謝し、御馳走になった。

サニースポーツの側の蕎麦屋さんだが、私には少々しょっぱい。運動している人や若者には丁度いいかも知れない。先日午後の一時半頃伺ったら丁度本日売り切れと言うかの様に、店員さんが入口の暖簾をしまっている所だった。中をその隙間から見るとあんじょうお客さんが所狭しと並んでいた。

時に美味しいものと言えば、幼いころのお袋の料理だろう。その味は人其々であり味覚の基準はそれに従うものと思う。だから、私にとって一番の御馳走は、母の幼いころの手料理となる。

朝五時に起きて朝食をとり、昼から天気が悪いとの事で足早に出かける。法華嶽公園から谷沿いに進むと茶臼岳林道の入り口にゲートがある。ここは事前に飯田さんが公園に鍵の借用を依頼し、前日安部先生がそれを借りていたので、まだ暗いうちに通れた。

林道はしかしゲートから五キロぐらいのところで崩壊しており通行不能。車を林道脇に駐車して七時半過ぎに登山開始だ。数年前に来た時の記憶と何故か微妙に違う？

林道はまだ後七キロ近くある。林道歩き約一時間一〇分でやっと終点。ここで遠江さんが先日の登山で痛めた膝の状態を判断し、山道に入る前に引き返す。さらに谷沿いの登山道に入り、少し行くと『私ももう行かない』と西さんも引き返した。

その少し先が掃部岳へ登る道との分岐点。左への道を分けて、深年川にかかる危ない鉄の梯子を渡り、急斜面を登る。この登りは、尾根までは難儀したが、尾根道は快適で気持ちよく歩けた。

空は何時降り始めてもおかしくない模様。頂上に着くまでは降らないでくれと願いながら登る。谷の分岐点から九十分で自分では二度目の式部岳だ。前回は北尾根ルートだった。山頂からの展望は期待通りだが、前回は快晴だったのと比べれば、今回はたれこめた雲で、遠くはほとんど見えない。

（式部岳にて）

ビールを開けたり写真を撮ったりしていると、空が少し明るくなり、向うには掃部岳が見えてきた。まだしばらくふ降りそうにはないし、せっかくだから縦走しようということになった。カモンといわれれば行くのは当然だ。安部先生は予定通りに引き返すことに。

尾根道はさほど高低差もなく、道もしっかり踏み開かれており、歩きやすい。おおよそ九〇分で掃部岳に到着した。今にも降り出しそうな空、展望のほとんどない山頂でとりあえず昼食休憩。だがその間にも小雨がぱらつきはじめた。

もう長居は無用と下山開始。奇遇にも十二時二十三分に出発した。標高は一二二三ｍなのだ。前衛峰との間の西側の谷が大きく崩れており、二〇年以上前に来たことがあるという飯田さんは、当時なかったその崩壊の様子に驚いていた。

ぱらつき始めた雨はいつの間にか止んでいる。深年川の最源流の、南のピークからは西に向かい南尾根を目指す。この尾根は対岸の尾根よりもさらに快適な散歩道だ。

（掃部山にて）

テープや記録付きの札のお蔭で安心して分岐点へ降りる地点の尾根を目指す。山でいつも感じる事だが、誰が植えたのか感心するほどの木々や草花の調和と景観美だ。秋の紅葉と初夏の萌えるような緑の輝き。植林や人間の手のはいった山にはその美しさは微塵もない。管理する人の心が反映されているものと察する。

一一二四ｍのピークを越え、一〇七六ｍのピークを巻いた鞍部が、深年川への下りの分岐だ。下り始めて二十分で分岐点ついた。式部岳への道を左に見て、朝きた道を引き返す。約一時間で駐車地点だ。

帰り着くと、昨夜の獅子鍋の残りでつくってくれていた、温かい雑炊が迎えてくれた。これを美味しく平らげる。心配した雨は最後まで降らずにくれた。

林道を引き返し、鍵を公園管理事務所に返しに立ちよる。ささやかな善意の集まりで様々なレジャーやスポーツが楽しめる環境は有りがたいものである。

車は内陸の広域農道を北上して日向市で国道十号線に飛び出す。これからの世界は大量生産、大量消費の時代から大きくチェンジしていくものと思が、自然と調和した文明になる事を願いつつ筆を置く。

参加者…西、飯田、安部、遠江、久保、中野

会員所属の山のクラブの紹介コーナー （№１０）

「山のいで湯愛好会」

加　藤　英　彦（８７６５）

１．会の創立の経緯

［その１］　「大分ヒマラヤ遠征委員会」とヒンズークシ遠征

昭和３５年に日本山岳会福岡支部より独立して、日本山岳会東九州支部が設立された。そのメンバーの中でヒマラヤ遠征という夢をもち続けた会員たちが「大分ヒマラヤ委員会」という組織をたちあげ、様々な困難、いろいろな障害をのりこえて、昭和４０年６月～７月にかけてヒンズークシ山脈に遠征隊６名を出した。そして、４０年７月３日、ヒンズークシ中部のコーイ・モンディ峰（６２４８ｍ）に登頂し、成功裡に帰分した。

［その２］　「大分登高会」

その成功したメンバーを中心として、山岳会「大分登高会」をその秋に発足させた。会の創立メンバーは日本山岳会東九州支部に所属する会員がほとんどで、その後大分登高会での台湾遠征や韓国にも、会の山行という形で参加していた。そしてまた、会の登山活動は、大分に「登高会」ありと言われたくらい充実した山行を重ね、府内町の一角にある会の『ルーム』には何時も若い会員が集まり、情熱を持って山を語り合っていた。

そのメンバーからは、遠くアンデスの壁に挑んだ者もいれば、ヒマラヤのジャヌー遠征隊に参加した者もおり、北アルプスの夏山には毎年のごとく出かけていき、そしてまた、地域研究として「傾山」をとりあげて、精力的に傾山の沢や壁に情熱を傾けた者、そして、その活動は手づくりの会報「登高」を世に出すことによりますますその活動が活発になった。（この会報は１３０号まで続いた。）

しかし、昭和５２年、会のカリスマ的な代表者であった一人の男の失踪で会は空中分解状態となり、有力なメンバーが退会していった。

［その３］　「山のいで湯愛好会」の誕生

そういった経緯の中、登高会を訳あって退会していったものの、どうしても山への情熱を捨てきれない者たちの、気心のしれた何人かのメンバーで、昭和５７年にこの会が必然的なように結成された。会の名称は「山のいで湯愛好会」として、昭和５９年７月１日、発行された会報の創刊号は「おゆぴにすと」という名称で、その巻頭言には会長となった私の文が、次のように記載されている。

「山のいで湯愛好会　とはいったいどんな会であるか。我々がめざす究極の目的は何であろうか。我々はかって同じ目的をもった山の仲間であった。いや、決してその当時の夢は捨てたのではない。身体の奥にはちゃんとその気持ちは息づいていたのである。あることがあってその山の会から遠ざかった形となったが、我々は山に対する情熱は依然として持ち続けている。その気持ちを持ったものが、何年か後に偶然ある山で出会い、そして話しは当然昔の会の話しとなり、必然的にこの会を結成するにいたったのである。単に山の会を結成するということだけではなく、「いで湯」という言葉を加えた意義を理解して欲しいのである。山に登って汗を流し、山をおりてさっぱりとその汗を洗い流す。温泉につかって一日の疲れをいやす。単に山に登るだけでもない。また単にお湯につかるだけでもない。現在社会に欠けている、何かつかめるものがこの両者にはある。我々はこの両者を相手にするときに本当の生き甲斐を感じるのもがある・・・・。」

２．おゆぴにすと

その後の会の活動は「おゆぴにすと」に記載してきた。

第２号　昭和５９年１２月２５日　　第３号　昭和６０年　９月１日

第４号　昭和６１年　３月３０日　　第５号　昭和６３年　６月１日

第６号　平成　６年７月１日

第７号以降はホームページとなった。そして、紹介の中に次のように記載されている。　「急速に発達したオフィスオートメーション化の時流の中で、会報のあり方について編集部で種々検討を重ねた。その結果、印刷物としての会報は６号までとし、７号以降は巻号形式を廃止。２００２年２月１日に立ち上げたホームページに１～６号までの全記事を再記載するとともに、以降、ホームページを更新し次号以降に替えることとしました」

そのアドレスは　http://www.oct-net.ne.jp/~w-hasama/

あくまでもこの会は会員個人の山行を中心として、それぞれがかっての山に対する情熱を持ち続ける大人の山登りをめざしており、各自が充実した、各自の山登りを楽しんでおり、それらを発表する場としてホームページに掲載しているのである。会則はなく、会費もない全く自由な山岳会でる。

最近の主な登山活動の例は

２００６年５月　祖母・傾馬蹄形縦走を１５時間２０分で成し遂げた記録

２００８年８月　南アルプス、光～塩見縦走などである

現在の会員　１６名（うち日本山岳会東九州支部員　４名　会友２名。遠くは関東在籍者も１名）

その他、何かあるごとに集まり、杯を重ねながら交流を深めている。たとえば、会員の定年祝いとか、還暦祝いとか、大分へ帰ったときとかである。２００２年２月に開設したホームページは７年になるが、これまでのアクセス回数が１００，０００になろうとしている。ユニークなＨＰであるので皆様も一度アクセスしてみて欲しい。

九三歳で久住山登山

中野　稔

橋本祥案先生、御年九十三歳になって一ヶ月で二度目の久住登山と相成った。

私の知り合いで、九十歳を過ぎて現役でボランティアや趣味をしている人はいない。大抵の人は病院にお世話になっているか、様々な施設、家庭で静かに余生を送っている。

日頃の思慮節制と日々の運動がその源と思われ、感謝、愛情、気迫が体力を維持して元気で日常を淡々と送っているのであろう。素晴らしいのひとことだ。

十一月三日、午前五時椎迫バス停を出発。湯平の大久保山（869.7m）の脇をすり抜け五時半頃横断道路に出る。六時過ぎに霧に包まれた牧ノ戸峠に到着。六時四十分の出発に合わせて準備していると、次々に有志が集まってくる。

気温は十度位、霧で視界が十メートル前後なので雨具を着る。八名位で出発したが、沓掛山を過ぎあたりから三々五々集まりだし、くじゅう別れの広場では三十名を超えた。

十月二日の時は三度ほど転んで肋骨に罅が入ったので、今回は万全を期して、ロープを襷状に掛け後藤（実）さんが補助するという手段に出た。岩場の登りよりもガレ場の下りの方が要注意だ。

先生の版画に描かれている様にぼつぼつ登る久住山である。Slow but steady wins the race をふと思い出し、学生時代の杵柄に近いもので、あの頃の思い出がフラッシュバックの様に鮮やかに蘇ってくる。

久住別れから山頂までは一時間ぐらい掛かり十一時前後に到着。三十名を超える山の仲間に囲まれての祝賀会と成り、居合わせた他の登山客達からの祝福を受けご満悦の表情を讃えている。息子さんも眉を細め嬉しそうな顔を写真の中に残している。

（久住山頂にて）

山頂はガスに包まれ、視界は得られなかったが、シャンペン、万歳三唱と儀式をし、食事をすませ、山に感謝しながら十一時半頃下山開始。

一人で行く登山もいいが、こうして沢山の人と行く登山も其れなりに楽しいもので、特に笑う質量は格段に違うものである。

下りのガレ場の所はより慎重に行動したお陰で、一度も痙攣するしたり、転ぶ事もなく無事に牧ノ戸に到着した。四時間半で登り下りは三時間二十分であった。

傾山 むこうかまど谷遡行①

久保洋一

7月13日午前6：00自宅発。三重から326号線を南下し、宇目町南田原で分かれ日ノ影方面へ向かう旧国道を進む。ところで有名になったところだ。木浦の少し手前で梅津越へ向かう道に入る。この道は狭くて、後で「間違った、このルートじゃなくて前に行った冷水コースのちょっと先が大白谷だった」と思い出したが後の祭りである。とりあえず離合もできない狭い道を進む。かなり進むと梅津越に出て中央線のあるりっぱな道と交差する。ここを左折して進み白谷の部落に入る。

後藤先生の地図を自宅に置いて来ており、ここからどう林道に入っていいかわからず適当に脇道を入っていくと、たまたま地元の若い人を見かけたので聞いてみると、入ってきた道を戻って元の道をさらに2、3km進んだ中山峠に案内があるとのことを聞き、ほっとする。

林道はゆっくり走らないとお腹をこするよと親切に教えてくれた。元の道に戻り中山峠まで進み、林道入り口の案内を見つけ鋭角に戻る形で林道に入っていく。これは前回祖母山のめんのつらの林道よりよほど道がしっかりしていて、おおむね気持ちよく走れる。かなり進んで進行方向右手の山が伐採しているかなり広い所に出た。地図を見るとここが駐車場のようだ。広場のはしに車を停めて8：40出発。

林道はまだそのまま続いているので林道を登っていく。20分くらい歩くと登山届のある登山道入り口に着く。ここから営林小屋（跡）までは通常のルートだ。道は立派でまず迷わない。登山道の一部には石を積んだ跡があり、営林小屋へ向けて昔整備した道らしい。9：25営林小屋到着。

営林小屋は骨格をどどめるのみ。そこから徐々に谷に下りていく。水の流れる音がだんだん大きくなってきた。でも谷の底は随分下の方にある。ところが登山道をカーブにそって曲がると急に沢が近くに迫ってきた。このコースはあおすず谷を遡行しながら三ツ尾にとりつくコースで途中2箇所、沢の渡渉がある。私の当初の計画では最初の渡渉をした後、この沢を少し下り営林小屋の下で谷が分岐しているところまで戻り、むこうかまど谷に入る予定だったが現地で見るとどうも分岐点に戻るのは大変そうだった。そこで、尾根をトラバースしてむこうかまど谷にまわることにして進んだ。ところがここも駐車場から営林小屋にいたるルートにあったと同様な石積のりっぱな道らしきものがあった。最近、人が通ってないのは明らかだが…。そのりっぱな道を快適に尾根を巻きながら通りむこうかまど谷へでた。

さて、これからが本日のメインエベントだ。ところが谷を少し登っていくとまもなく滝、とても滝の両サイドは登れそうもない。へなへなとここで腰がなえて座り込みそうになる。まだ最初の滝だというのにもう引き返そうかなんてちらっと思ったりする。

まっ、もう少し進んでみようと谷の左岸（沢では上流から見て左側を左岸と呼ぶ）の尾根を登っていく。かなり急な登りだ。登り始めてまもなくカメラ部品が落ちている。さては滝を撮影に来て落としたんだなと、そのときの状況が目に浮かんだ。プラスチックのカメラ部品は自然界ではゴミでしかないので回収し先へ進む。

滝の大きさからかなり大きく高

巻きしないと滝は越せないことはわかるのだがなるべく最小限の回避にとどめたくて、少し登ってはトラバースしようとするが絶壁で先に進めない。仕方なくさらに登る。この繰り返しでかなりはっきりした尾根に取り付く尾根は木もまばらで木の下は落ち葉だけでとても快適だこのまま尾根コースに切り替えようかなんて思うほどだ。

折角こんなに高度も稼いだのだしなんて思いながら谷の方へ降りていこうとする先ほどと違うちいさな谷を挟んでいる。その谷（水は流れていない）を超えて元の谷にやっと戻る。そしたらまた次の滝が控えている。これも左岸の尾根に取り付き高巻き、そこでもまた谷に戻ろうとすると別の谷を挟んでおりその谷を越えて元の谷に戻る。

これから４００ｍくらいは順調に谷を登っていくことが出来る。といってもかなり水量があるので谷の両サイドのうち進めやすそうなところを適当に登っていく。ここにはゴルジュはないので楽に進める。

右岸にかなりゆるやかな斜面が現れて、谷の水の流れとあわせてとてものどかですてきな景色がひろがる。自然林はまばらに立っており自由にどの方向でも歩いていける。また来ることがあったら慌てて登らないでこんなところでテントを張って一泊なんてのがいいなーと思う。

標高１０７０ｍくらいのところでまた滝に出会う。この滝は右岸を高巻き、さらに１００ｍも進むとまた別の滝に出会う。この滝だったと思うが二段になっておりかなりの落差があった。この滝も右岸より高巻き。かなり大きく巻いて超えた。これからは水量も徐々に少なくなり快適に谷を進むことが出来る。

標高１２００ｍくらいの位置に来て前方を見ると目の前に地図と同じ景色が現れた。事前に地図を見てこの辺はどの谷に進むか迷いそうなところだなーと思って何度も地図を見ていたところだ。谷が三方向に枝分かれしている。

シルバコンパスを用いれば現在地がわかっているのだから自分の進むべき谷は容易に特定できる。ここではＧＰＳにたよりながら進んでいった。地図には書いてないがここらあたりも確かな水の流れがある。なだらかな登りがしばらく続く。谷にはバイケイソウがかなり群生していて一部花が咲いている。バイケイソウを踏まないように気をつけながら進んでいく。

沢はかなり枝分かれしているが結果として確かな流れのある沢を遡行すると予定のルートだった。何度か分岐点で迷ったが枝分かれした沢を登っていくとＧＰＳの次の目標ポイントまでの距離が大きくなり、これは違うなと別の沢に進むって形だ。これで結果的にさっき書いたように確かな流れの沢を登ればよかったということが後でわかった。

（以下次号へ）

イギリス湖水地方トレッキング①

下川智子

主人の定年退職を記念し、英国での二つのトレッキングを中心に、六月一日から七月三一日までの二ケ月間、ヨーロッパを巡ってきた。六月一四日から八日間、イングランドのコーストツーコースト、六月二六日からスコットランドのウエストハイランドウェイ七日間のトレッキングを体験。今回はイングランドのコーストツーコースト（湖水地方）のトレッキング報告をしたい。

このコースは、イギリス人アルフレッド・ウェインライトが一九七三年に完成させたコースで、イングランド北西部のセントビーズヘッドから東海岸のロビンフッドベイの町まで三つの国立公園湖水地方、ヨークシャーディルズ、ノースヨークムーアズを抜ける約三〇六Ｋｍのコースで、イングランドで最も風光明媚といわれる岸壁や平原、山脈、渓谷、荒野を通る。今回は初めてのことでもあり、その西半分の一六四Ｋｍを八日間で歩くガイド付きの現地のトレッキングツアーに参加した。

ツアー料金にはホテルと荷物の輸送、朝夕の食事、昼の弁当にあたるランチボックスが含まれている。

六月一四日（土）　夕方、スコットランド人の男性ガイドと英国人男女六名の参加者全員がセントビーズ駅に集合。駅からホテルまでは専用のマイクロバスで移動。ホテルでの夕食後、ガイドのアンガスより明日からのトレッキングツアーの説明がある。朝食や出発の時間、明日の天気、コース説明等。

このミーティングは八日間のトレッキング期間中、夕食後三〇分から一時間かけて毎晩行われた。しかし、アンガスの英語はスコットランド訛りが強く話していることの半分もわからない。この先どうなることかと不安になる。

大事なこと（朝食や出発の時間）はこちらが復唱して確認する。かなりの不安はあるもののアンガスはじめ皆フレンドリーで雰囲気はとてもいい。

六月十五日（日）　初日。六時起床。七時半朝食。九時半ホテル出発。トレッキングスタート地点のセントビーズヘッドまではマイクロバスで移動。全員で記念写真の後、大西洋岸のアイリッシュ海の水に手を浸して旅の無事を祈るという、昔からの出発の儀式をしていよいよトレッキングスタート。天気は快晴、真っ青な海と空が美しい。西洋の向こうに「スコットランド」と「マン島」が見える。

スタートしてすぐ坂道となりしばらく登ると海を見下ろす百メートル程の高さの絶壁の道が岸壁の上に北へ延びている。岸壁にはかもめや日本では見かけない珍しい鳥が飛び交っていた。道は真っ直ぐ北に延びて歩きやすいが左側が絶壁なので慎重に歩く。途中に白い灯台が建っている。道はやがて直角に右に曲がり内陸部へと入る。

一二時過ぎ、サンドウィズの町の公園で昼食。昼食と言っても日本の登山の昼食と違い時間が短い。一回が五分、長くて一五分から二〇分。昼食というよりエネルギー補給のための小休止という感じ。アンガスは五分の休憩をワンバナナストップ、一五分の休憩をツーバナナストップと表現していた。バナナ一本食べ終えるくらいの休憩ということらしい。

短い昼食タイムはイギリスの天気も関係している。イギリスでは「一日に四季がある」といわれるほど天気が変わりやすい。朝、晴れて素晴らしい天気でもあっという間にシャワーとよばれる小雨が降り始めたかと思うと、雨や雹に変わり冷たい風が吹く真冬の寒さとなる。こういう気象条件のもとでは、短時間にエネルギー補給をして歩き続けるというスタイルになっても止むを得ないと思った。

サンドウィズから道は上りとなり、丘陵地帯を通りムーアローの町を抜ける。フットパスの柵をくぐり日当たりの良い牧草地を歩いて小休止。牧草地なのでフットパス上にも牛や羊の糞が多数落ちていて日本人組はついよけて歩くけれど、イギリスチームは全く意に介さず踏みつけて歩いて行く。このあたりの感覚の違いも面白いと

思った。

一四時四五分、デントヒルの頂上着。特に長い休憩をするでもなく下山開始。牧草地をしばらく歩いた後、急傾斜の一直線の下り坂を一気に下りる。平地では競歩のようなスピードで歩くイギリスチームが山や渓谷のような上り下りではガクンとスピードが落ち、山登りに慣れている日本チームが俄然元気になり先頭をきって歩く。これはコースを通してずっと繰り返された。途中の山腹に頭部が白く胴体は茶色のふさふさした毛に覆われたバルカンと呼ばれる珍しい羊を見かけた。昔、ヴァイキングが連れてきたとのこと。

一六時三〇分、今夜の宿泊地シェファーズアームズホテル着。シャワーを浴びて夕食後ミーティングをして一日を終える。

セントビーズからエナーデイルブリッジまでの二二Kmを六時間三〇分で歩く。

（以下次号へ）

牛頭山

西　孝子

第五〇回目巳丑年十二支会に参加。大分より阿部和代、西の二人。事前の連絡に『アイゼン持参』とあったが、持たずに発つ。前夜祭で十二支会旗の受け渡し式。

雪が多くルートにロープがあり『何とかなるわ』で出発する。前日の雪で、バスの中から見る景色は五、六センチの白一色。しかし、峠を越えると雪はない。地形により、南面は冬ではなく、秋のなごりの景色である。

着くと一年一回会う山友の顔々である。新入会員、ビジターの紹介があり、全部で七〇名の参加者である。宿泊地はしんしんと雪の降る夜となる。

一月十一日（日）　朝食（和食）七時、出発八時、広島市安佐町野外活動センター下車、荷物をあずけ、リュック、ストック、登山靴にはアイゼンをつけ出発する。

舗装の車道を登山口まで二十分歩く。活動センター研修棟前で、スニーカーもどきの靴の人は『積雪はいやだ』と一〇名ほど残る。登山口より私はスパッツなしで最後に歩く。何のこともなく急坂を雪をふみしめて登る。鎖ではなく太いロープが出てくる。ダブルストックで呼吸をととのえ歩く。めがねがくもり前が見にくい。

ロープも終わり、本日の目的の山、牛頭山東峰（六八九m）と西峯（六七二、六m）との鞍部に、あと五メートルのところでメガネの左のレンズが落ちる。下を向いてさがしていたら「ロープを持って登るといい」と言う声に「いいえ、レンズさがし」と答えると、鞍部にいた案内者の山口県の人がおりてきてさがしはじめた。「もういい」と言いのこして急坂を二十五分で山頂だ。

ここで今年還暦、古希、喜寿、傘寿の計十三名にお祝いを渡す。還暦祝は今年は阿部和代一人であった。山頂からの眺めはすばらしいとのことだが、雪空で何も見えない。三角点もなし。皆は弁当を開くが、私は昼食も食べず、案内者にことわって先に下る。

二つの山頂を持つこの山は、三角点のある東峰を飯室牛地山、主峰の西峯を牛頭山と呼ぶ城山の跡である。鞍部からやわらかい登り二〇分で東峰の山頂だ。三等三角点で大声でセレモニーのバンザイとヤッホー。鞍部にもどるともうみんな下っているのだ。あわてて、走りながら下る。雪道あるきに大はしゃぎしながら下る。

バスで三〇分でJR可部線の安岐飯室駅へ、さらに広島駅まで二五分、駅前から原爆ドームへ行く。市電を見てバスの運転手が『バスの適』ということなどを聞きながら、二五分でつく。ドームをひとまわりして、市電一五〇円で駅にもどり、新幹線に乗る。

雪の中に落としたレンズは『右足のところにあった』と、山頂で受け取る。渡して下さった、下松から参加した山口県の方、有り難うございました。帰宅後メガネ屋に行ったら、『プラスチックは寒いところに行ったら縮む』とのことである。

支部の皆さん、一年に一回の十二支会へ入会しませんか？

広島往復三万円（特急券のみ）

戸次本町の三角点のある山

安部可人、石川洋祐

横江山　（464.3m）三叉路、フェンスの施設の横にゲート。入ると電波塔の直ぐ右の草原に四等あり。

夜明城　（463.7m）反射板のある伐採で見晴らしのよい三叉路を南へ上がる。山城の跡だろう。散歩によい。二等あり。

九六位山　（451.7m）大分百山、三等三角点。

狐塚　（357.8m）竹中の玉泉寺より黒仁田林道、320m地点（中畑への分岐の手前）、木に古いテープ（下山後知る）。ヤブの作業道は直ぐに良くなり、終点から北へ楽々18分。祠と三等。

大内　（299.7m）340m（カーブ地点）、北へあがるとクヌギ幼木林。真西へ下りぎみの縦走路は暗い照葉樹の林の中。岩稜、ヤセ尾根、四ツのピークにはうんざり。60分で四等。下りは四〇分。単独。

鳥岳　（265.3m）峠集落より二七九号鉄塔の西、峠（幹線13柱）よりすぐ250mの台地へ上がり、照葉樹の境を南西へ。左の小鞍部へ下り右へ行くと直ぐに三等三角点。そばに祠あり。いいルート。単独。

竜王山　（224.8m）蕨野の白い屋根の鶏舎の左から、田んぼを東へ行き、突き当たりのゆるい谷に駐車。

すぐに小池あり。北東方向へ進み照葉樹（右は植林でヤブ）の中を急登一五分で尾根へ。南に急角度で右折し、やや急坂を上る。一五分で三等三角点に着く。暗くて眺望はない。最短ルートだろう。

荒平山　(216.6m)ゆるい峠から左のセメント管二つ放置のそばから入る。中は快適。七分で南西の尾根へ。石の鳥居、祠を見て三等三角点へ。三五分間。

半久保　(197.3m)大内集落をいくと右に影平への標識あり。入ると直ぐに三叉路で右の坂を上がる。西に目指す峰が、見える。尾津留への荒れた林道が右に分れる。直進するとみかん園で、そのはずれに駐車。平坦な尾根の東の端に入る。素晴らしい照葉樹林。（何故か蝉の大合唱）一七分で四等到着。

吉野　(195.1m)吉野の儀徳尻、儀徳公民館（尻ぬき）よりさらに集落の奥へ。最奥の二軒みえる橋から舗装の林道に入る。１５０ｍで北から尾根へ、一八分で四等到着。

馬〆（しめ）　(192.8m)臼杵市久木小野の清掃センターから高速下を通って松原集落へ。集落西最奥の家を過ぎ、松原橋ににに駐車。直ぐに二又があり、その中の尾根を上がるとすぐに鉄塔あり。植林から第二鉄塔横を過ぎたら左へ適当に上がる。尾根の途中の草と倒木の中に四等三角点。よくぞ見つけたり。三五分。

志津留　(192.2m)長畑集落の奥の溜め池横に駐車。左（東）の作業道を南へ登る。平らになったところの三叉路より左へ入る。素晴らしい自然林。楽に二五分で四等。

花香　(187.8m)右に花香キリシタン墓群の石碑を見て、豊肥線の線路を渡り、集落奥の二本のコンクリート柱のそばに駐車。沢の水汲み場から左へまいて上がると、山腹を池へまく林道と合流。左へ約４００ｍで竹林が切れたあたりの、法面の低い地点から直登していくと左に四等。三五分。

屋永　(186.7m)大分市最南端の川原集落、カーネーション（夢根房）に駐車可。東にめざす峰が見える。谷に下ってとりつくと三〇分の急登で主尾根に合流。左へすすみさらに南東へといく。竹が侵入してきている広く平坦な稜線はヤブで意気消沈。我慢の三五分間。残された大木数本の空間に四等発見。登りは苦戦。下山は西へ直進し、楽々と墓地へ出る。（これだけは地形図「犬飼」）

梨尾山　(179.8m)大塔集落の公民館に駐車。手前の鉄塔から尾根へ。防火用水を経てしいたけ場から右にとりつく。植林地と自然林の境のウラジロの中を登る。東方向へ行くと切り開かれた空間があり、楽々、三等三角点へ三五分間。いい山だ。単独。

尾道谷　(172.8m)　端登の「陸橋記念」碑から豊肥線線路を渡り、鳥巣集落へ。林道鳥巣線が下り始めたら左へ、ため池の畔に駐車。右に四分で道か消えて正面に高度差五〇ｍの直登。これは大失敗。上は間伐の倒木に悪戦苦闘二〇分。

尾根に着いたら右へ、ウラジロの中にＩ氏の感が冴えて四等発見。帰りは左の境を楽々下山。

影ノ木　(158.2m)影ノ木集落手前の信号を、吉野工場のすぐ先を左に軽トラ道あり。吉野川沿いにいき、沈み橋に駐車。獣道を南へ直登しのどちんこ形の一〇〇ｍ尾根にでる。南南東へ快適な登りで一五〇ｍ台へ。南へ軽いヤブこぎ七〇ｍほど。落ち葉の中に四等。いい山だ。

桑津留　(148.4m)吉野ゴルフ場入り口の橋に駐車。左の空き地の左手に道があるがすぐに行き止まり（九電の白柱）。草の中を東へ三〇ｍで対岸に道が見え、泥の小川を渡る（難渋）。鉄塔の右をまき、楽々溜め池の左の水路へ。東岸は快適な散歩道で三〇〇ｍで、東南東に直登すれば二〇分で四等。

城山　(137.6m)長曾我部信親墓の対岸に、鏡城（竹中山・71m）あり、その先の老人ホーム前を三〇〇ｍで下らずに三叉路に駐車。左へ七分でとりつき点。木立の中の楽しい登り一〇分で四等。この山の南東はきれ落ちて目だつ。

正願　(137.6m)月形ゴルフ場のクラブハウス前の、コース間の公道を南へ五〇〇ｍ。下り始める地点に駐車し、二～三分、林の空間の中に四等。

萩尾　(134.3m)高須集落の二十四番地蔵様の前に駐車。林道を北へ四〇〇ｍで左へ入り、三分で四角のコンクリートの土台の四等。

津留　(129.5m)吉野中学校の南の老人ホーム誠寿園前から東に小径を四分。台地に平安大師、日切大師の立派な地蔵様。ベンチ横に四等あり。

谷　(108.4m)不動寺農場の手前を左へ四〇〇ｍで立て札二つ。その手前３０ｍがとりつき点。竹まじりの嫌なヤブ。南南東へ三五分で四等。

辻　(95.5m)長林禅寺の幼稚園の前の家の裏手、ミカンの幼木の空き地の真中に四等。

馬場原　(92.6m)宮ノ原橋から上がり、豪邸の左の止まれの標識に駐車。鉄塔五七号の巡視路があり、楽しい散歩道。鉄塔が見え、幼稚園が見えたら左の台地に苔むした貫禄の三等三角点。一二分

冬田　(89.8m)玉泉寺手前の四叉路（黒仁田林道起点の白柱）を右へ。地形図の「竹」の字のある右横の峠（堀割）に駐車。５０ｍ先にとりつく。ヤブもなく一五分で四等。

庄屋　(69.7m)判田台団地の東のはし。宅地開発からわずかに残された小さな自然。北側、がけの下は半田小学校グラウンド。四等

私の無名山ガイドブック36

里山の稜線歩き（その７）

飯田勝之

今回も東国東の里山の稜線歩きコースを二つほど紹介しよう。

「大恩寺」(211.9m)

田深川沿いの下成仏と富来川沿いの大恩寺とを結ぶ峠道に、古い「犬鳴隧道」がある。車一台がやっと通れるような、今にも壊れそうな素堀りのこの、怖いようで懐かしさも感じられるく細く長いトンネルを南から北に抜けると、道は左と右に道が分かれる。

左（西）は未着工のトンネル入り口で、広い改良車道が北に向かって下っている。右（東）に入るのは林道で、アスファルト舗装されている。この右の道を四〇〇メートルほど行った地点の左に駐車スペースがある。ここに駐車して南側の斜面に取り付くのだが、分岐の入り口からこのあたりまでは、右手の林はかっての果樹園で、今はほとんど荒れたままの放置林と化して、ブッシュも深い。

しかし東に林道を５０ｍほど行くと、その右手のスギの植林地の斜面が踏み込むのに手頃だ。スギ林の中の、歩きやすい所を選びながら一〇分ほど登ると照葉樹の林

に代わり、やがて稜線に着く。

稜線には東から踏み跡道が来ている。これを西にたどるのだが、ごく緩いアップダウンの心地よい稜線漫歩が満喫できる。シイ、カシ、タブの照葉樹の木々はもちろん二次林だが、すでに見事に復活した照葉樹林である。しばし平らな稜線が続いたあと、やや急な登りとなり、稜線歩きを始めて一五分ほどで小ピークに達する。ここが点名「大恩寺」の四等三角点の地だ。

南側下方は下成仏の里が近く、車のエンジン音や犬の鳴き声が聞えてくるが、それも時折りで、あとは静かな照葉樹の林の中、小鳥の声が聞えてくる。稜線はここから西は二手に分かれるが、左は田深川に下り、右が主稜で高度を下げて犬鳴隧道の上へと続くのだが、高度を下げきった所から、果樹園のあとのブッシュの稜線となる。

（大恩寺）

「東堅来」（203.8m）

堅来川の上流を通るオレンジロードの、「畑」の集落の北、畑隧道の北側出口がこのピークに登る取り付き点によい。トンネルの北のコンクリート擁壁が切れるところに、トンネル照明の電気キュービクルがあり、その脇が入り口だ。

わずかにブッシュを分けると、そこはマダケの混じったスギ林で、かなりの急斜面が控えている。これを南東方向にトンネルの上に向かって直登することとなる。斜面は急だが、林は深いブッシュもなく比較的に登りやすい。一〇分足らずで照葉樹の林になり、一層登りやすくなるが、斜面は相変わらず急だ。

入り口から二〇分ほどで小ピークに達する。ここはトンネルの真上あたりで、主稜線の上だ。ここより左（東）に向かってやや下ると、右手からピークを通らずに巻いてきた踏み跡道と出会う。この微かな踏み跡道はピークの少し南下方を巻いてここより西に続くが、その先はやや低木の覆いブッシュ状の中に消えている。しかし東の方はタブやシイ、カシ、ヤマモモなどの高い木々が覆う照葉樹の稜線に、かなりはっきりとした道が残り、快適な稜線漫歩のルートだ。

ほとんど平らな、わずかにアップダウンの稜線には、ほぼ２０ｍおきに頭部に「水」と書かれ、横には「大分県」と書かれたコンクリート杭が立っており、途中にはマンホールの蓋も見られる。どうやらこの稜線上には、ミカン園開拓パイロット事業の水路が引かれていたようである。

トンネル上のピークから一〇分ほどで急な登りとなり、三、四分の上りで平らな広い山頂に着く。その中央には二等三角点がある。

高度二〇〇あまりの山頂で、人里近い所にありながら、深山の雰囲気を感じさせるのは、極相林に近いまでに見事に復元した照葉樹林の林相のおかげであろう。

（東堅来）

お知らせ

二月月例山行のご案内

・二月二二日（日）
・目的地…**200mの山へ**＝伊勢山・200.0m（中津市旧耶馬渓町）、猪口山・206.1（中津市旧三光村）
・出　発…二月二二（日）
午前六時サニー出発

三月月例山行のご案内

・三月十五日（日）
・目的地…**300mの山へ**＝大力山・304.9m（豊後高田市）、峠・305.4m（豊後高田市旧香々地町）
・出　発…三月十五日（日）
午前六時サニー出発

四月月例山行のご案内

・月　日…四月十九日（日）
・目的地…**400mの山へ**＝**松ケ内**・400.0m（佐伯市旧本匠村）**大畑山**・400.3m（佐伯市旧宇目町）**滝川迫山**・400.2m（佐伯市旧直川村）
・出発…四月十九日（日）
午前六時サニー出発

アンケートのご協力有り難うございました

忘年会の出欠の返事と併せてハガキでアンケートをお願いしましたが、１２０通発送して、６３名の方から回答を頂きました。その結果はおおむね次の通りでした。

一・五〇周年記念海外山行について

（1）適当と思う行き先（回答40）
①ヨーロッパアルプス：8（20%）
②ネパール・ヒマラヤ：25（62.5%）
③その他：7（17.5%）

（2）適当と思う期間（回答35）
①一〇日程度…17（48.8%）
②二週間程度：15（32.9%）
③三週間程度：3（8.5%）

（3）参加の意向
①必ず参加：5名
②できれば　参加：20名
③希望通りなら参加：2名
④参加は無理：23名
④まだ未定：11名
無回答2名

※　全回答者数と、（1）（2）の回答者数が違うのは、（3）で参加は無理と答えた方でも（1）及び（2）に回答して下さった方と、（1）だけ回答して下さった方と、参加しないのでいずれも回答しなかった方があるからです。

これらの結果を参考にしながら行き先や日程等、五〇周年事業の具体的山行計画をたてていくことになります。

二・支部報について

（1）どのくらい読んでいるか
①ほとんど読む：46（73%）
②全部は読まない：16（25.4%）
③時々読む：1

（2）どういうところを読むか
①月例山行：40

②行事報告・34
③シリーズもの・22
④個人投稿・27
⑤お知らせ・25

※　支部報は、ほとんどの方から愛読されていることが示され、編集局としてもいっそうの緊張を覚えたところです。読む内容も多岐に渡っており、今後いっそうバラエティに富んだ内容にしなければと考えさせられました。今後の編集に対する具体的な注文や意見もいくつも頂いております。今回の皆様の回答を、今後どのように活かすか編集会議の中で検討し、より充実した支部報になるように努めていきたいと考えています。

ご協力有り難うございました。

（K・I）

事務局よりお知らせ

韓国山岳会・蔚山支部との交流登山会

・日程…五月二日（土）～六日（水）の予定です。
・行先…これから蔚山支部と連絡を取って決めます。
・参加者…三月二日までに参加希望をとりまとめます。

※　今年はこちらから韓国を訪問する番です。多数の参加をお願いします。

平成二一年度支部定例総会の予定

・日時…四月一八日（土）
　受付　一八時より
　開会　一八時三〇より
・場所…大分市府内町
　「コンパルホール視聴覚室」

※　会員・会友の皆さん、多数出席して下さい。

支部役員会の開催（通知）

・日時…三月一八七日（水）
　一八時より
・場所…大分市府内町
　「コンパルホール・三〇七会議室」
・議題…①定例総会の議題等について
　②五十周年記念事業について
　③その他

※　各役員及び、五〇周年記念事業の主担当（主担当が出席できない場合は副担当）の方は必ず出席して下さい。

五十周年事業担当者は上段（別記）の通り

ここは何処？

・この写真は何処から何処を撮ったものでしょう？

・お分かりの方は事務局まではがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。（二名まで、正解多数の場合は抽選します。）

・　締め切り三月三一日

前回の正解は経読岳西の肩から小屋ケ岳を撮ったものでした。

（別記）

五〇周年事業実行委員会各任務主・副担当者名簿

係名	主担当	副担当
記念講演会	梅木秀徳	
記念式典	宇津宮隆史	
記念祝賀会	加藤英彦	
資料展示会	佐藤浩幸	中野　稔
記念山行（国内）	野村芳雄	緒方俊一
記念山行（海外）	甲斐良治	
記念誌作成	安東桂三	
参加記念品	甲斐良一	
総務	安藤　幹	飯田勝之
記録・広報	首藤宏史	阿南寿範
事務局	西　孝子	

後記

○　秋の山歩きの楽しみは、木の実やキノコの収穫が付録にある。時には付録ではなく、それが目的の山歩きとなることもある。

○　木の実やキノコも終わる晩秋となと、地面に落ちた銀杏（ギンナン）もいい。素手で拾うとかぶれるのがやっかいだが・・。

○　同じころ見逃せないのが山芋のムカゴだ。山道の脇の小枝や幹に巻きついたツルに、やっとくっついているような黒い、少しいびつな形の丸い小芋は、ちょっと手に触っただけで落ちてしまう。

○　ギンナンにしても、ムカゴにしても、冬の夜の熱燗にはもってこいのおつまみになるのが嬉しい。

○　今号の編集をしながら、片手にはグラス、そばの皿にはムカゴの味噌炒めがある。

（K・I）

日本山岳会東九州支部報　第４４号

２００９年（平成２１年）１月２５日（日）
発行者　梅　木　秀　徳
編集者　飯　田　勝　之
発行所　〒870-0021
大分市府内町１－３－２０
サニースポーツ内　西　孝子方
TEL･FAX　097-532-0926
題字　（故）佐藤正八